

# ミヒヤエル・エンデ 『モモ』における時間の本質について

小 林 良 孝

Michael Ende 著《MOMO》は、1973年に世に出され、その年にドイツ児童文学賞を受賞した。1993年時点でも既に33カ国語に翻訳され、現在でもその人気は衰えず、子供たちのみならず大人たちによっても読まれている。

この本の表題『モモ』には『時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた子供についての不思議な物語』という副題がついている。すなわちこの物語は、人間の「時間」をめぐる、「盗む」・「取り返す」のファンタジック・アクション・ロマンなのである。

ここで問題なのは、一つには、この物語で言う「時間」とは何かという事であり、もう一つは、「盗む」とか「取り返す」とかいうことはどういうことなのかということである。本稿ではこれらの問題について論じる。

## 第1章 この物語で問題としている時間とは何か

エンデは第6章の冒頭で次のようにいっている。

重大ではあるけれども極めて日常的な秘密が一つあります。人間は誰もがそれに関与していて、誰もがそれを知ってはいるのです。しかしそれについてよく考える人は極く極く少数なのです。大多数の人はそれを単にそのまま受け取っているだけで、それを爪の垢ほども不思議には思っていないのです。この秘密とは時間なのです。

時間を測るためには、カレンダーや時計がありますが、これはほとんど重要ではなさそうです。というのは、時間というものは誰もが知っている通り、その時その人が何を体験しているかに従って、たった2、3時間なのにそれを永遠のように長く思うこともあるし、時には、それはほんの一瞬のうちに過ぎ去ってしまうこともあり得るからです。というのは、時間は生活だからです。そして、生活は心の中に宿っているものなのです。

(Zeit ist Leben. Und das Leben wohnt im Herzen.)<sup>(1)</sup>

この命題により、エンデが問題としている「時間」は明確に規定されている。これは本稿の要であるので、念のためにもう一度明確にしておこう。すなわち、エンデが問題としている時間は、時計で測定される数量としての時間ではなく、その人がその時何をして「体験している」(erleben)かにより、永遠にも、時には一瞬にも「思われる」(vorkommen)時間なのである。つまり意識化された時間、主観的な時間なのである。しかも、その時間は「生活」(Leben)なのである。従って、エンデが問題としている時間とは、人々が日常、意識的に営んでいる「生活」そのものである、ということになる。換言すれば、各人が選び取った「生活」の送り方、つまり自ら決定して選び取った生活内容としての時間なのである。

従って、「時間どろぼう」とは生活内容どろぼうということであり、その結果として、それまでとは異なる生活内容が導入されることと同じことであり、「盗まれた時間を取り返す」ということは、もとの生活内容を取り返すということと同じことである。

具体的な生活内容は、具体的な生活理念によって決定される。この観点からすれば「時間どろぼう」とは、ある特定の生活理念を奪い取り、それに代わって別の生活理念を導入し定着させることであり、「盗まれた時間を取り返す」ということは、元々の生活理念を復活させる、ということなのである。

従って、物語『モモ』は、人々の生活内容を語りつつ、根本的にはあるべき生活理念を論じていると見なすことができるのである。言うまでもなく、登場人物モモは、あるべき生活理念の擁護者であり、灰色の男たちはあるべき生活理念の略奪者であり、あるべからざる生活理念の導入者である。モモと灰色の男たちの抗争は、時間をかくれみのとした生活理念をめぐる抗争物語なのである。更に踏み込んで言えば、モモ対灰色の男たちの争点は、あるべき心・精神は何であるかということであり、実生活において実現すべき価値は何であるべきかと言う問題なのである。

## 第2章 モモの時間の本質

エンデは、物語『モモ』の舞台を次のように物語っている。

…しかしこれらの古い大都会のいくつかは、今日に到るまでなお大都会であり続けているのです。勿論そこでの生活は変わってしまいました。人々は今では自動車や電車に乗り、電話や電気を使っています。それでも新しい建物の間のあちこちには、昔の円柱や、門や、外壁が残っていたり、あ

るいは昔の屋外円形劇場が残っていたりします。

そしてこのような都市のひとつでモモの物語は起きたのです。

この大都会の南はずれ、すでに野原が広がり始め、家々はだんだん見すばらしくなってくる所に、松林におおい隠されて、一つの小さい屋外円形劇場の廃虚がありました。それは当時の昔でさえ決して豪華なものではなく、当時でさえもいわば貧乏人むけの劇場だったのです。私たちの時代には、すなわちモモのこの物語が始まった時には、この廃虚はほとんど忘れ去られてしまっていたのです。<sup>(2)</sup>

ある日、どこからともなく1人の少女がやって来てこの廃虚に住みついたのである。その子の名は自称モモ。<sup>(3)</sup>すなわち、モモは時代の変化の中でほとんど忘れ去られてしまったものと、しかもこの世の富とかきらびやかさとは縁もゆかりもないものと結びついているのである。モモに年齢をたずねても要領を得ない。仕方なく100歳と答えたり、102歳と答えたりして、モモの身を案じてその廃虚にやってきた近隣の人々の失笑をかうだけである。親は誰か、どこからやって来たのかとたずねられても、仕方なくゆき当りばったり、ただうろうろ遠くの方を指さすだけなのである。つまりモモの出自には、現実の人間の存在規定である時間規定も空間規定さえも欠如しているのである。モモに関して不思議なのはこれだけではない。それは、モモの持っている能力である。この不思議な能力とは「聞く」能力である。これについては、子安美知子著『「モモ」を読む』（学陽書房）の中で、次のように述べられている。

86年の夏、来日中のミヒャエル・エンデ氏を私たちの日本シュタイナーハウスにお迎えしたとき、かねてからモモの「聞く力」に深くとらえられていた友人たちのひとりが、

「エンデさん、あの秘密は何でしょう。不思議な力ですね。」

とたずねました。エンデ氏は、かみしめるような口調でこう答えました。

「モモが身につけていたような、ひとの話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくからにすることにあります。それによって、自身の中に他者を迎える空間ができます。そしてその相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女の中にはいつてくるものが、良いものか悪いものかを問うことをしません。<sup>(4)</sup> (20 ページ)

モモの「聞く」能力が不思議な能力であると言われる理由・根拠は、モモが「聞く」時のモモの心の状態にある。上に引用したエンデの言葉によれば、モ

モは「彼女の心の中に入ってくるものが、良いものか悪いものか問うことをしない心の状態」で聞くのである。こういう心の状態が不思議なのである。それ故、モモの「聞く」能力は不思議な能力なのだ。こういう心の状態を人によっては、誕生以前の心の状態と称するかもしれない、また人によっては空の状態とか無の状態と称するかも知れない、また人によっては深層自我の状態と称するかもしれない。ここはエンデの言葉を受け入れて、「から」の心の状態と称することにしよう。いずれにせよ、10歳くらいにもなってしまった子供がこういう「から」の心の状態になれることが不思議で、並ではないのだ。ましてや、40歳、50歳と年をくってしまっ、て、分別ざかりの年齢になってしまったら、こういう心の状態にはなかなかなれるものではないのだ。だから不思議なのだ。

モモの「聞く」能力が不思議な能力である理由、根拠は、モモの「聞く」行為それ自体にもある。モモが「聞く」行為には二つの意味がある。モモの「聞く」という行為は、良し悪しを言わずに、ありのままの相手を自分の心の中に迎え入れる行為なのである。モモはこうして相手を自分の心の中へ統合し、自ら進んで相手と全一の存在となる。ここにおいてはもはや、自他の対立はおろか、区別さえも存在しない。この時、モモの心の中にはありのままの相手が自己自身として存在する。従って、自己のごとく、相手がありのままによくわかるのである。モモが耳を傾ける相手は人間だけではない。オオムやコオロギにも、風や雨にまで耳を傾けた。モモが特に耳を傾けるのが好きだった対象は大宇宙であった。大宇宙に耳を傾けている時、モモには言うに言えぬ程美しい宇宙の音楽が聞こえてくるのであった。こうしてモモは、宇宙の森羅万象と統合した完全な全一的存在だったのである。従ってモモの持っている徳は、対立的他者との分離関係に基づく徳ではない。モモの持っている徳は、他者と統合した全一的モモ自身に存在根拠がある徳なのである。他者に存在根拠がある徳を自然的徳と呼ぶのに対して、他者に存在根拠を持たない徳を超自然的徳という。モモの持っている徳は、この超自然的徳である。それは、愛する、希望する、信ずる、空想する、この四つである。<sup>(5)</sup>

モモの「聞く」行為にはもうひとつの意味がある。これは、モモが灰色の男の話を書く際に特に顕著に表れている。

しかし、この男の話を書くことは、これまで彼女が相手にしてきた誰の話を書くよりももっとむずかしいのです。ほかの人の場合には、いわば相手の心の中へすっぽりと入り込んでいって、相手が言っていることも、相手の本当の心も理解することができたのです。しかし、この訪問者の場合

に限って、それがどうしてもうまく行かないのです。何回やってみても、そこには誰も居ないみたいに、暗やみの空虚の中へ落ちこんで行くような感じなのです。<sup>(6)</sup>

モモの「聞く」行為は、自分の心をからにして全力で相手の心の中へ入っていく行為でもあるのだ。こうしてモモは聞きながら、自分を相手に統合させ、相手をも自他全一の存在たらしめる。しかし、相手を自分の心の中に迎え入れることによって現前する全一的存在と、自分の心を相手の心の中に入れることによって現前する全一的存在は別のものではない。モモが「聞く」ことによって、自分も相手もひとつの全一的存在を共有するのである。そしてこの全一的存在の中では自他共に相互に相手の徳に働きかけられた状態になっている。そしてその働きかけに感応するか否か、あるいはどの働きかけにより敏感に感応するかは、その当人の個性と能力にかかっているのである。すなわち、モモの側から絶えず、愛する作用、希望する作用、信ずる作用、空想する作用を加え続けていても、その働きかけのうちのどれに感応し、どれと共振するかは働きを受ける側の個性や能力によって決まるのである。

このことは物語『モモ』では、次のように語られている。

モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人にも急に分別のある考えが浮かんできたのです。モモは、相手の人がそのような考えにたどり着くように誘導するようなことを言ったり、たずねたりするわけでは全然ないのです。モモはただそこに座って全身全霊で注意をかたむけ同情心をもってひたすら聞いているだけなので、その時モモは大きな黒い目で、相手の人をじーっと見つめているのです。そうするとその当人は、自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか、今まで思ってみたこともないような考えが急に浮かび上がってくるのを実感するのです。

モモに話を聞いてもらっていると、途方にくれてぐずぐずしている人々でも、自分たちがしようとしていることが急にはっきりとわかってくるのです。あるいは内気な人々は急に自由闊達勇気りんりんたる気分になるのです。あるいは不幸な人々や意気消沈している人々は、自信がわいてきてほがらかになるのです。<sup>(7)</sup>

これにひき続いて、エンデは上に抽象的に述べたことを具体的に物語として展開していく。

「ばかな人にも急に分別のある考えが浮かんでくる」場合として、左官屋のニコラと安居酒屋の主人のニノとの喧嘩話としておもしろおかしく語られてい

る。この2人は各々自分だけが一方的に侮辱されたと思いこみ、お互いに悪いのは相手だと思いこんでいる。また、自分だけが一方的にだまされ、自分だけが一方的に被害をこうむっていると思いこんでいる。こうして2人は積年のうらみで殺し合いにもなりかねない程仲が悪かったのである。そんなある日、モモが現れる。まわりの人々から、モモの所へ行ってごらんとすすめられて、しぶしぶモモの所にやって来る。2人は廃虚の円形劇場の両端に陣どって、モモの目の前で、仇敵同士の果たし合いのような激しい口喧嘩を始める。お互い相手を非難し合っているうちに、双方に等しく原因があったということ、しかもその原因たるや、たいして悪気もない他愛もない駄じゃれだったということがわかってくる。また、自分の方が一方的にだまされ、自分だけが損をしていると思い込んでいたことも、実は双方とも負けず劣らずうまいことをしようと欲を持っていたことがわかり、実際には、双方ともあまり損も得もしていなかったこともわかってくる。

そうすると突然、2人は同時に笑い出しました。2人は石段を降りてきて、草の生えている舞台のまんなかで出会い、お互いに抱き合っけて背中をポンポンとたたき合いました。それから2人はモモを抱いて言いました。「どうも、ありがとう！」<sup>(8)</sup>

こうしてモモのまわりの世界では、憎悪と不信、敵害心と恐怖に満ちた社会生活が消え去り、和解と思いやりに満ちたほがらかなしあわせな社会生活がおのずと営まれるようになるのである。これをキーワードで言えば「隣人愛」、更に言えば「愛」である。

モモに話を聞いてもらっているだけで、「自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか思ってみたこともないような考えが急に浮かび上がってくる」場合の典型は、観光案内人ジジの場合と子供たちの場合である。子供たちの場合は、何をしていいのかわからずに「途方にくれてぐずぐずしている人々でも、自分たちがしようとしていることが急にはっきりとわかってくる」場合の例としても、「内気な人々は、急に自由闊達、勇気りんりんたる気分になる」場合の例としても見なすことができる。まずは子供たちの場合を見てみよう。

ある日、10人程の子供たちがモモと遊びに円形劇場へやってくる。あいにくその時は、モモは外へぶらつきに行っていて、るすであった。そうすると、次のような状態になるのである。

「私、もう家へ帰ろうかな。」と、小さい子供を連れている女の子が言いました。「雷が怖いわ。」

「じゃあ、家に居れば、怖くないのか。」と、めがねをかけた男の子が言いました。

「怖いわ。」とその女の子は答えました。

「じゃあ、ここに居たって同じじゃないか。」と、その男の子は言いました。その女の子は肩をすぼめて、うなずきました。しばらくすると、その女の子は言いました。「でも、モモはきっと帰って来ないわ。」

「それがどうしたというんだよ。」と、少しだらしない身なりをした男の子が話にわって入ってきました。「そうだとしても、僕たちは遊ぶことはできるじゃないか——モモが居なくたってさ。」

「じゃあ、何をするのよ。」

「知らないよ。でも、何かだよ。」

「何かじゃ、どうにもならないわ。誰かいい考えはある？」

「わかった」と、かん高い女の子の声をした肥った男の子が言いました。「遊ぶことができるよ。この廃虚全体が一隻の大きな船で、僕たちは未知の海へ乗り出して行って、冒険をするんだ。僕が船長、君は一等航海士だ。そして君は自然研究者の大学教授だ。なぜならこれは、研究のための航海なんだからね。他の子は水夫だ。」

「じゃ、私たち女の子は何なの？」

「女水夫だよ。これは未来の船なんだから。」

これはいい計画です！ 彼らは遊ぼうとしました。しかし、皆の気持ちがじっくりひとつにはならないのです。この航海ごっこは始まりませんでした。すぐに皆は石段に座りこんでしまい、ただ待っているだけでした。<sup>(9)</sup>

モモが居ないと、こんな状態になるのである。そこへモモが帰ってくる。そうすると、どうなったか。モモと一緒に居るだけで、子供たちは死からよみ返ったように生き生きと、しかも全員心をひとつにして、「アルゴ船」ごっこを始めたのである。研究船「アルゴ号」は、子供たちを乗せて、サンゴ海の大海原へ、波頭を高々とけたてて大冒険へ向かって船出して行ったのである。この冒険の様子は、原文を読んでもらう方がいい。子供たちのこの自由闊達さ！ 彼らの勇敢さ！ 天かける空想の豊かさ！ 子供たちは夕立が来たのにも気づかない程、遊びに熱中したのである。<sup>(10)</sup> これらの子供たちの能力をキー・ワードで言えば、「勇気」、「空想」、「熱中」、「喜び」である。

モモに話を聞いてもらうだけで空想力に命を与えられたのは、上に述べた子供たちだけではない。モモを恋い慕うハンサムな青年ジロラモ、通称観光ガイ

ドのジジの空想力もモモとの出会いによって、子供たちのそれ以上に、生き生きと空に舞い上ったのである。

以前には彼のお話は、みじめな状態に陥ったこともしばしばありました。どうしてもちようどいいことが思い浮かんでこなかったからです。いろいろな話を繰り返し話したりしてもいました。映画で見たことのある話や、新聞で読んだ話をやむを得ずひっぱり出すこともありました。言うならば、彼の話は、足で歩いていたのです。しかし、彼がモモを知ってからは、彼の話は突然翼を得たのです。特に、モモが傍らに居て、彼に耳を傾けていてくれる時には、彼の空想力は、さながら春の野辺のごとく花盛りになったのです。子供たちも大人の人たちも彼のまわりに集まってきました。今や彼は、何日間も何週間も続く長い物語でも話すことができました。話の種は無尽蔵に思い当たるのでした。<sup>(11)</sup>

こうして彼は、類まれな観光ガイドになったのである。とは言え、この円形劇場の廃墟を訪れる観光客はきわめて少なかった。そんないわば迷いこんできた珍客を見つけると、ジジはさっそく観光ガイドに早変わりして、奇想天外な物語を空想のおもむくまま語りながら、この廃墟を案内して回るのである。

ある日の彼の話によればこうだ。昔々、シュトラパチア・アウグスティナという名の欲深い女帝がいた。アウグスティナ女帝がブルブルビクビク族を征服した時、噂に聞いていた金魚を強制的に献上させた。ブルブルビクビク族の王は本当の金魚は隠し持ち、この魚は完全に成長してしまった後には全身がそのまま純金に変わる金魚でございますといつわって、1匹の子鯨を献上した。本当の金魚を知らなかった女帝は、それを真に受けて、その鯨を大切に飼育させた。「大きければ大きい程いい」<sup>(12)</sup>と思っていた女帝は、鯨が成長するのに合わせてとうとうこの円形劇場に水を張って、ここにその鯨を泳がせておいた。つまりこの円形劇場の廃墟は、昔々鯨を飼っておいた池の跡だというのである。

また、他のある日、アメリカ人観光客相手のジジの話はこうだ。昔々、〈赤い王〉とあだ名された暴君マルクセンチウス・コムヌスという王がいた。彼は、今ある世界を見ずして、完全に新しい世界をつくる方がいいと考え、今ある地球を材料にして全く新しい地球を作るよう、命令した。観光ガイドジジの話によればこの円形劇場の廃墟は、マルクセンチウス・コムヌス王が作らせた新しい地球をのせておいた台座だったというのである。

ジジの空想力が最も美しく花開くのは、観光客が誰もいなくなった晩、美しく星のまたたきはじめた大空の下、円形劇場の廃墟の石段の一番上で、モモと



仲よくならんで腰をおろし、2人きりでないしょ話をする時である。その話は、「魔法の鏡のお姫さま」<sup>(13)</sup>という題で語られている。彼のこの話によれば、モモは「天界の国」のお姫さまで、ジジは下界の「あすの国」の王子さまジロラモだったというのだが、特にこの物語は、荒筋で紹介するのはやめておいた方がいいであろう。一字一句読んでもらう方がいい。

要するに、アウグスティナ女帝の話にしろ、マルクセンチウス・コムヌス王の話にしろ、「魔法の鏡のお姫さま」という題の話にしろ、ジロラモの生活・時間の本質は、従ってモモがジロラモの生活において実現した時間の本質は、キーワードで言えば「空想」（空想力の躍動）と「愛」である。空想は、古来、人間の備えるべき秀れた心の能力、すなわち徳としては等閑視されてきたものである。しかし、空想は人格の豊かな成長に不可欠のものであり、この空想と対極をなす現実とは、時として空想に新しい命を与え、あるいは空想を健全に育てるものなのである。あるいはその逆に、空想によって現実には新しい内容を与えられることもあり得るのである。このことは、エンデ著『はてしない物語』の主題でもあろう。ともかく空想と現実とは、独自に存在しつつ相補的に作用し合ってはじめて人間の生活・時間は健全に豊かになるものなのである。

しかし、この円形劇場を訪れる観光客はほんのたまにしかいなかった。だからジジは他の仕事にも手を出さざるを得なかったのです。機会さえあれば彼は、公園の番人にも、結婚式の立会人にも、犬の散歩役にも、恋文の運び役にも、葬式の参列者にも、おみやげ物売りにも、ネコのえさ売りにも、その他たくさんいろんなことをやりました。

しかしジジは、いつかは有名になり、お金持ちになることを夢見ていました。庭園にかこまれたおとぎの国のように美しい邸宅に住んで、金のお皿で食事をして、絹の布団にくるまって眠るのだ、と夢見ていました。そして彼は、まるで太陽のような未来の栄光の中に居る自分自身を夢見ていたのです。そうするとその未来の栄光の輝きは、極貧のどん底にいる今の彼を、いわば遠くから温めてくれるように温めてくれたのです。

他の人々が彼のこの夢を笑いものにでもしようものなら、彼はどなりつけたのです。

「俺はきっとやってみせるからな！ 今に思い知らせてやるからな！」<sup>(14)</sup>

このように彼の生活は、「希望」・「夢」に満たされていたのである。つまり彼の生活時間の本質は、「希望」でもあった。

このジロラモと甲乙つけがたいくらいモモが好きだった人に、もう1人、道

路掃除夫のベッポが居た。このベッポじいさんもジロラモ青年と同じように、モモと不思議な縁で結ばれていた。しかし、ベッポじいさんの性格や生活信条は、ジロラモのそれとは好対照をなしていた。観光ガイドのジジは、あまりにもけたはずれの空想力故に他人からは嘘つき呼ばわりされることもあった。道路掃除夫ベッポは、あまりにも無口だったため他人からは頭のいかれた奴だと思われていた。しかしこの2人は、決して相手を非難することもなかったし、ばかにすることもなかった。互いに耳を傾け合い、互いに一目置き合っていたのである。これもモモの徳によって結ばれていたためであろう。

道路掃除夫ベッポは頭がおかしいと思っている人もたくさんいました。というのは、彼は質問されてもただにこにこしているだけで答えなかったからです。彼はよく考えこんでいたのです。そして返事は必要ないと思えばだまっていました。しかし返事が必要だと思えば、どう返事をすべきか、よくよく考えていたのです。2時間も考え続けていることはよくありました。時にはまるまる一日中考え続けていることもありました。それからやっと彼は返事をしたのです。そうこうしている内に質問をした当人は、自分が何を質問したか忘れてしまっているのです。ベッポの言うことを奇妙に思ってしまうのです。

モモだけはいくらでも長く待つことができましたし、彼の言うことがよく理解できました。彼がこんなに長い時間をとるのは、彼がけっして本当でないことは言わないようにしているからだということが、モモにはわかっていました。彼の意見によれば、この世の不幸はすべて、急ぎすぎたため、あるいは正確なことを知らなかったため、わざとついた嘘や、思わず知らずついた嘘が原因で生まれてくるのだ、というのです。<sup>(15)</sup>

正に彼の徳は「正直」・「慎重」そのものだったのである。更に、ベッポの仕事に対する考えはこうだ。

彼は自分の仕事を喜んで念入りに徹底的にやりました。彼は、この仕事がとても大切な仕事であることをよく知っていました。

道路を掃除する時、彼はゆっくりと、しかし着実に行いました。一歩進んではひと呼吸し、そしてひと呼吸してはひと掃きするのです。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。こうして仕事をしている最中にも彼は時々しばらくの間立ちどまっては自分の足もとを見て、もの思いにふけります。それからまた続けるのです。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。一歩——ひと呼吸——ひと掃き。—— —— ——<sup>(16)</sup>

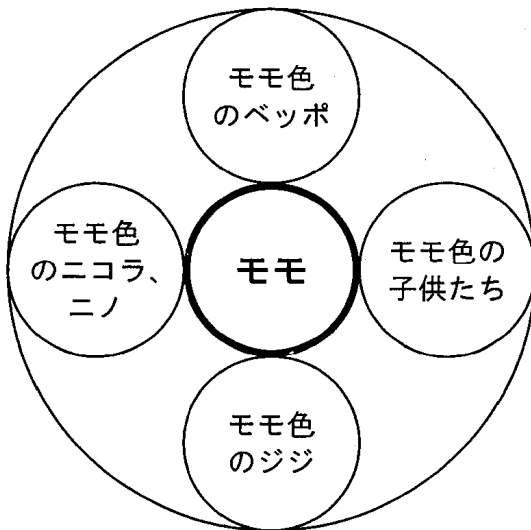
ベッポは、世間の人々がさげすむような道路掃除の仕事の重要さを、信じて疑っていないのである。かつまた、世界の人々が嫌がるこの仕事を喜んでやっているのである。しかも、仕事を急いでやろうとか、能率よくやろうという考えは全くない。物思いにふけりながらゆっくりと着実にやるのである。

ベッポは、こうして道路掃除をしている時、何百年も前の昔を見ることがあった。彼の話によれば、昔々、このまちの旧市街の外側に市壁を造る工事が行われた時、彼とモモは共にその工事にたずさわっていた同朋だったというのである。彼は過去世を見る能力を持っていた不思議な人なのである。この点で、ベッポの眼差しは、夢見るジロラモの眼差しと正反対の方向に向けられていた。要するに、ベッポの仕事・生活・時間の本質は、「信念」・「喜び」・「思慮」にある。

ベッポの仕事ぶり、つまり生活の仕かたからは是非読み取らなければならないことが、もう一点ある。それは、ベッポにとって大切なのは、仕事は慎重に徹底的に、つまり良心的に完璧に、しかも嬉々として仕合わせな気持ちで行うということであって、決してそそくさと、いいかげんに、しかも不満たらたら行っはならないということである。ベッポにとって大切なのは、仕事の質であって、量ではない。そしてこの点こそ正に、次章で説明するように、モモの時間が灰色の男たちの時間と直接的に対極をなしている点なのである。

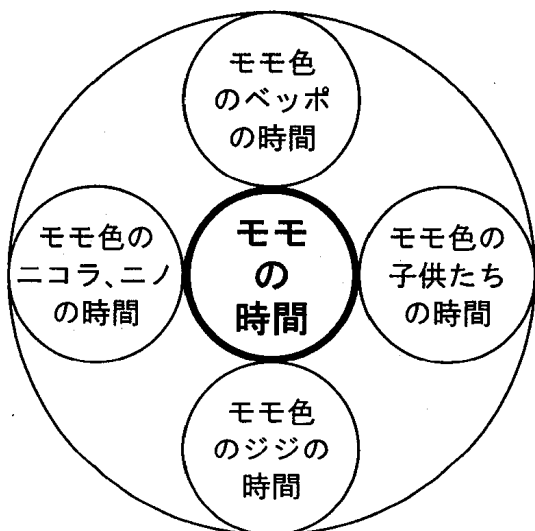
以上が、モモに話を聞いてもらうことによってモモに感化された人々として、この物語の中に登場して来る人々である。モモに感化されたこれらの人々を、その各々の名の前に「モモ色の」という形容詞を冠して表示することにする。そうすればモモによって実現された世界は、第1図で表わすことができる。

第1図

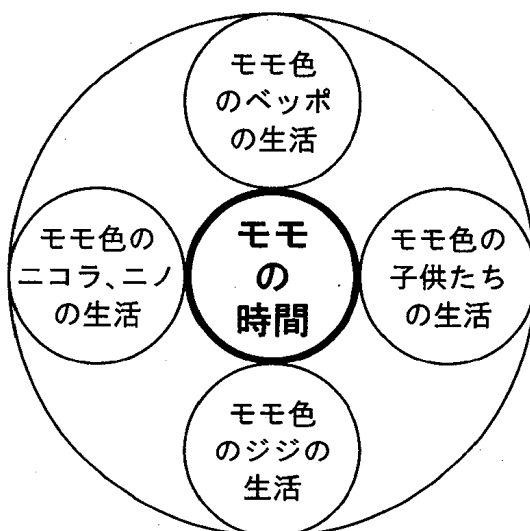


ここで、既に引用したエンデの時間についての命題をもう一度引用しよう。「時間は生活である。」すなわち、時間=生活である。これを図で表わすと、次のようになる。

第2図



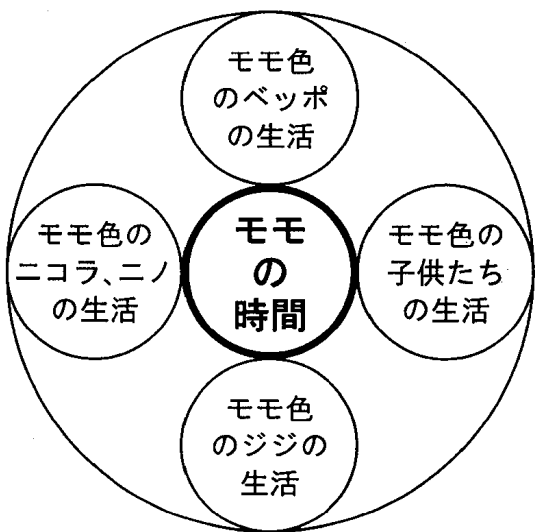
第3図



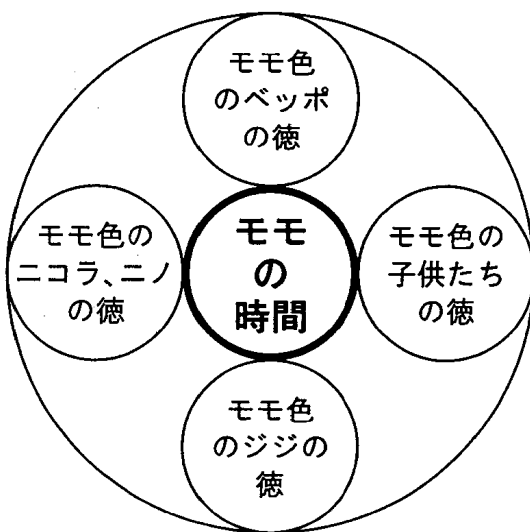
人々の生活は、その当人の能力と心の状態によって形成される。モモに感化された人々の心の能力を徳という概念で置きかえれば、人々の実生活は、その当人の能力及び徳によって形成されるということになる。従って、その人の能力や徳（内面）が変化すれば、その人の実生活・生活の仕かた（外面）も変わってこざるを得ないのである。その人の生きざま、すなわち実生活は、その人の能力や徳と表裏一体の関係にあるものなのである。エンデが『モモ』で展開しているのは、正にこの局面での時間なのである。

これを図で表わせれば、次のようになる。

第3図 外側



第4図 内側



『モモ』という物語の中で展開されている、この人はこうした、あの人はああしたこうしたという具体的な行為を抽象して、この人の徳はこれだ、あの人の徳はあれだと論ずるのは、本稿の筆者の解釈である。しかし、『モモ』で問題にされている「時間」を本質的に明確にするためには、これは不可欠な作業なのである。では、モモに話を聞いてもらうことにより、これらの人々がどのような徳を身につけたのか、これは本章において個々の登場人物の生活を描写しながら既に述べてきたことであるが、ここでそれを総括すれば次の通りである。

モモ色のニコラとニノの徳：**愛**（隣人愛） 熟練

モモ色の子供たちの徳：**空想力** 勇気 熱中 喜び

モモ色のジジの徳：**希望** 空想力 愛（恋愛）

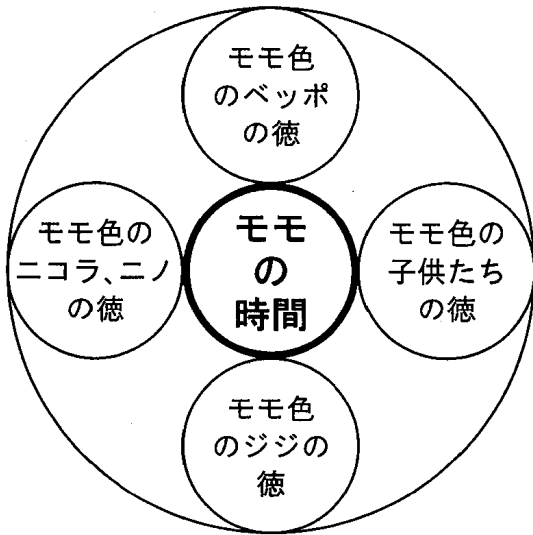
モモ色のベッポの徳：**信念** 愛 思慮 正直 勤勉 喜び

上記の愛と希望と信念は、伝統的には「超自然的徳」と呼ばれている徳である（子安美知子著「エンデと語る」朝日出版 83～84ページ参照）。ここで一考を要するのは「空想力」である。この空想力は、伝統的には、自然的徳の内にも、超自然的徳の内にも数え入れられてはこなかった。エンデ自身も、空想力は自然的徳であると言っていないし、超自然的徳であるとも言っていない。かといって、徳ではないと言っているのでもない。しかし、モモを取巻いている世界の中では、子供たちはきわめて重要な構成員であり、空想力はそれらの子供たちのきわめて重要な能力なのである。このことは、子供たちの「アルゴ船」ごっこの中で十分に語られていたことである。それ故、空想力も明確に徳の一つとして数えられるべきである。それなら、空想力は、自然的徳であろうか、超自然的徳であろうか。空想は現実を超えている世界への想いであり、現実としての自然を超えている世界への思考である。空想力は、自他分離認識に基づき、他＝現実としての自然に、このましく対処するための手段的な徳ではない、すなわち自然的徳ではない。空想力は、人間に自他分離認識以前から本源的に備わっている能力であり、本源的生命の躍動そのものなのである。それ故、空想力は超自然的徳である。

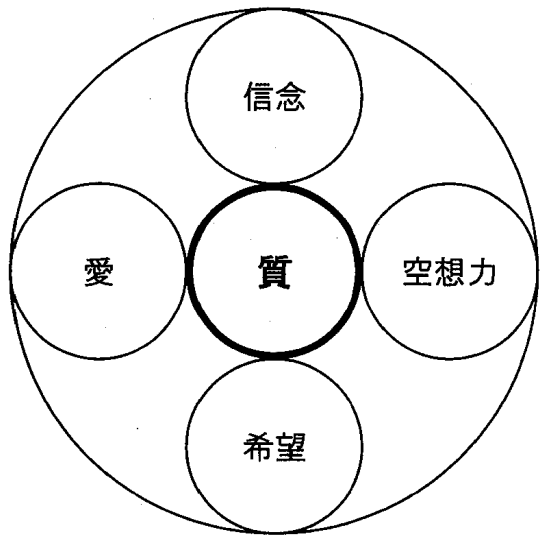
こうして見ると、モモの世界の時間は、超自然的徳を基盤とし、更にその上に自然的徳を補助的に加えて形成されているのである。

そして、エンデは上記の徳を質としてとらえているのであって、けっして計測可能な数量としてとらえているのではない。この点も、モモと灰色の男たちとの関係を考慮に入れれば非常に大切な点である。これを図式化すれば、次の通りである。

第4図

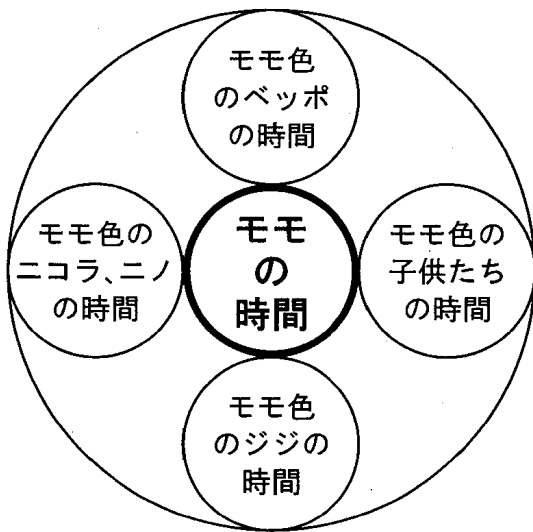


第5図

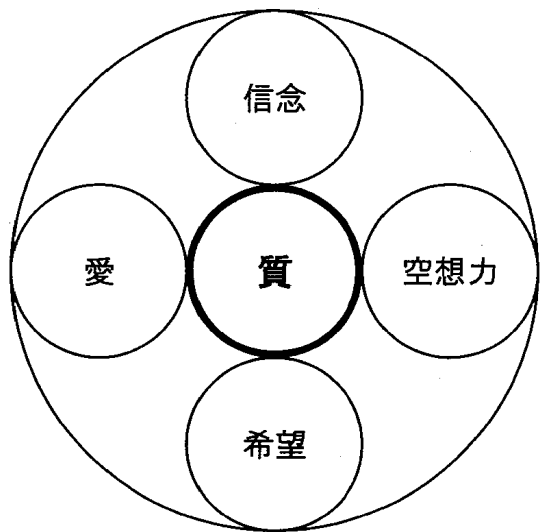


結局、モモの時間（第2図）は本質として見れば第5図で表わされる。

第2図



第5図



こうして、質本位の価値観をとるモモを中心とした世界では、その世界の構成員の個性と能力に応じて、各々の超自然的徳を身につけ、モモの価値基準から見た理想的世界がまず実現されたのである。モモは、質本位の価値全体（第5図）を擬人化したものと見ることもできる。物語『モモ』のストーリーの展開としては、このモモの世界の中へいよいよ灰色の男たちが登場して来る段取りになる。

### 第3章 灰色の男たちの時間の本質

モモの登場が、人々の日常生活意識の変化を述べる道具だてだったと同様に、灰色の男たちの登場も人々の日常生活意識の変化を述べる道具だてである。

この3人の友情にやがて影がさすことになろうとは、3人の内誰一人として気がつきませんでした。彼ら3人の友情にだけではなく、この地方全体にこの影はさし始めたのです。その影はどんどん広がって行き、今では暗く冷たく、街全体に広がってしまったのです。それはまさに、音もなく、人に気づかれずに日一日と深くくい込んでくる侵略軍のようでした。しかし、彼らに対しては誰一人として自分の身を護る人はいませんでした。なぜなら、誰一人として彼らに気がつかなかったからです。この侵略軍とは——それはいったい誰だったのでしょうか。<sup>(17)</sup>

この侵略者に初めて気がついたのはモモであった。やがて、ベッポとジジも、周りの人々の生活の異変に気づく。

ジジは……言葉を続けた。「最近おれは、街で昔なじみの人に出会ったんだ、フージーという名前の床屋さんさ。しばらく会ったことがなかったので、しばらくの間彼だとは気づかなかったよ。とにかく彼はすっかり人が変わってしまっていてね、とっても神経質で、とっても無口で、とっても無愛想になっていたよ。昔は彼はいいやつだったのになあ。歌をうたうのは上手だったし、何ごとについてもしっかりと自分の考えを持っていた。ところが急に、彼にはそういうことをしている時間がなくなったのさ。彼はもはや彼自身の幽霊にすぎない、もはやあのフージーなんかではない、わかるかい？ それが彼一人だけなら、あいつは少し気が変になってしまったんだとおれは思うだろう。しかしどこを見まわしても、今ではこんな人々しか見あたらないんだよ。しかも、こういう連中がどんどん増えてきている。今では、おれたちの昔なじみの友だちでさえ、そうなり始めている。伝染する気狂病なんていう病気があるんじゃないかって、本当に疑ってしまうよ。」

ベッポはうなずいて言った。「全くだ。あれは一種の伝染病にちがいない。」<sup>(18)</sup>

灰色の男たちの出現は、正に人々の生活意識の変化、従って日常生活の仕方の変化として、従ってその人柄の変化として表われてきたのである。

それでは次に、これらの灰色の男たちが人々をどのような手段で侵略するのか、また、侵略されてしまった人々は、どのような変化をとげるのか、これを具体的に見て行くことにしよう。

